



Seishu The Kyoto University Library Bulletin

静脩

2001年12月

Vol. 38, No. 3

近世京都図の特性

大学院文学研究科・文学部教授 金田章裕

1. 中世の平安京図

京都は平安京として建設されて以来、1200年以上にわたって都市として連続的に展開してきた点で、日本の都市の中でも希有な存在である。従って、その都市図についても、日本では最も早くからの歴史を有している。

鎌倉時代に書写されたものと推定されている九条家本の『延喜式』には、巻43, 左京京職の部分に「左京図・右京図」が付されている。鎌倉末から南北朝ごろの有職故実の書である『拾芥抄』もまた、類似の地図類を収載している。『延喜式』図と同様に平安京の街路・邸第などを描いた左・右京図は、「東京図・西京図」と題されている。

この『拾芥抄』の東・西京図と同様の地図で、より詳細な内容を有した仁和寺蔵京都古図の存在も知られており、『拾芥抄』図よりやや古い13世紀初頭を下らない時期以前の成立にかかわる。

これらの中世の平安京を表現した地図の直接的な起源は不明であるが、いずれも平安京の基本計画に基づく左・右京の範囲の街路網と主要施設・邸第を標記しており、古代的要素を基礎



としていることは確かである。

16世紀ごろの京都は、左京域を中心とした洛中と、その周辺の辺土ないし洛外からなり、洛中洛外と併称することで実質的な市街の全体を表現することが多く、やがていくつも作成された絢爛たる洛中洛外図屏風がその全貌をよく示している。

2. 黎明期の近世京都図

洛中洛外図と総称される鳥瞰図様式の図ではなく、平面の地図様式の京都図のうち、近世最古のものとして知られているのは、元和6, 7年(1621, 22)か寛永元年(1624)作製と推定されている四曲一雙の屏風図であり、市街の表現

法は『拾芥抄』図などと酷似している。

手書き図としては、次いで洛中絵図と称されている縮尺1500分の1の実測図が著名である。これは、寛永20年（1643）ごろに京都所司代の命によって作製されたものであり、道路の幅員まで記入された巨大な地図である。『拾芥抄』図などと異なり、方形方格の平安京のイメージを踏襲してはいないが、洛中のみを対象としている点では、前代の地図の基本姿勢と軌を一にしている。

この間、京都では江戸・大坂に先がけて都市図の刊行も始まった。「都記」（旧称寛永平安町古図）と記された地図が、わが国最古の現存刊行都市図であり、寛永元年～3年ごろの刊行とみられている。北は一条通りから南は七条通りまで、東は寺町から西は二条城西側ないし壬生大路付近までを表現しており、街区を黒く刷り出している。この図の外形は厳密な方形とはなっていないが、御土居が描かれておらず、表現範囲や表現様式は『拾芥抄』図などと類似のものとなっている。

「都記」のように、街区を黒く表現するのは、初期の刊行京都図に共通する様式であり、17世紀中ごろまで続いた。ただし、「都記」以後の刊行京都図は次第に表現の範囲を広げ、周辺に洛外の寺社の絵を配置するようになる。刊行年・版元を明記した京都図としては現存最古のものである慶安5年（1652）山本五兵衛刊の「平安城東西南北町並之図」は、その嚆矢である。

「都記」と同様の様式を保ちつつ、東を鴨東の六波羅、西を新設された島原の「けいせい町」、北を相国寺付近まで市街の表現範囲を広げ、周囲に50以上の有名寺社を絵画的に描いている。つまり、京都図に洛外が出現し、観光地図としての性格を帯び始めていることになる。

3. 林吉永による京大絵図の大成

京都図が伝統的な左・右京図の影響を脱するのは、17世紀末のことであった。京都図の刊行

は、江戸図のそれと同様に極めて盛んであり、日本の都市図刊行の二大拠点となった。

林吉永は江戸中期の京都を代表する書肆であり、大型の手彩色京絵図の刊行で一時代を画した。

林吉永の初印本は、貞享3年（1686）刊の「新撰増補京大絵図」であり、それまでの京都図の墨刷縦長の様式ではなく、東西を横に広くして洛中洛外共に表現を詳細にした。それまでの地図において墨色で充填されていた街区を白抜きにし、その区画内にまで情報を記入し、また洛中洛外の表現の一体化と、著名寺社や名所について加えられた地誌的記載も大きな特徴である。さらに図の南端付近には、当時の京都市街における中心的位置であった一条札辻（一条室町付近）から主要な町・寺社などへの里程が記されるなど観光地図としての機能を充実し、京大絵図の一つの完成した画期的様式を示している。

この様式は、林吉永自身によってさらに推進され、寛保元年（1741）には、「増補再板京大絵図」と題したさらに大型の木版手彩色の京都図を刊行した。この図によって京大絵図は一つの頂点に達した。同図は、「北山より南三条迄」と「北三条より南伏見迄」の二枚に分割され、町並や道筋、主要屋敷名、寺院の宗派などが詳細に記載されている。御土居に囲まれた洛中を8分1町（5000分の1）の縮尺とする一方、周辺の洛外部分の縮尺を縮めて図中に盛り込む様式は貞享3年刊「新撰増補京大絵図」と同様である。ただし、同図の改訂版開版以来、道程の起点は「一条札辻」から「三条大橋」に移っており、「増補再板京大絵図」では、図の南端付近に、三条大橋を起点とする距離・方角を方位円盤の形で示している。また、以前にも図中に記号を記入し、その説明を周辺に一括していたが、同図では独立した形の諸大名の京屋敷一覧表を付すなど、記述内容も極めて豊かで充実したものとなっている。

4. 小型・中型ガイドマップ、内裏図の盛行

林吉永の京大絵図は、室内において周囲からのぞき込む形で利用され、鑑賞にも耐える見事な出来映えであるが、実際に京の見物に携帯するには大きすぎる版型である。18世紀には、名所旧跡の観光や寺社参詣が流行し、『都名所図絵』のような挿絵によって説明した観光案内書が出版されるような趨勢の中で、林吉永自体も一方で、小型・中型の携行可能な京都図を刊行した。ただしこれらは、街区を墨刷りで表現する旧来の様式のものであり、京大絵図に見られるような先進性は乏しい。

携行用小型図では、正本屋吉兵衛による安永3年(1774)刊の「懷宝京絵図」が、それ以前の墨刷りした上に手彩色を施す一般的な手法ではなく、色版木と合羽刷りの技法を用いており、京都図では最初の色刷り図である。18世紀の京都図では、このような小型図の盛行が大きな特徴であり、中小版元の活動も目ざましいものであった。

天明7年(1787)刊の「早見京絵図」は、「あらまし御見物の御方様」用に赤線を入れて京都早見コースを示している。安永7年(1778)菊屋長兵衛刊の「改正両面京図名所鑑」は、縮尺16000分の1の分間図であり、裏面に名所案内を印刷している。文化8年(1811)の初版以来半世紀に及ぶロングセラーとなった竹原好兵衛刊の「都名所自在歩行」も、裏面に名所案内が印刷されている。同図は洛中部分について東西の縮尺を南北より小さくし、東西に圧縮した体裁の図面とし、携帯に適した形を考案している。

ところで、慶長12年(1607)に京都所司代板倉勝重の下で整備が始まった公家町は、京都の都市構造を特徴付けるものであり、内裏図ないし公家町図も京都ならではのものである。延宝5年(1677)林吉永刊の「新改内裏之図 御紋入」は、内裏と公家町を含む一帯を描いた現存最古の刊行図であり、禁裏・仙洞御所などの建物を絵画的に表現し、公家屋敷と紋所・公家名を標

記したものである。この様式は、後に数多く出版された公家町図にも踏襲され、とりわけ幕末の文久・慶応期に、世情を反映して集中的に刊行される。

5. 竹原好兵衛による多色刷大絵図の刊行

林吉永によって大成された京大絵図が木版手彩色であったのに対し、江戸時代後期の版元竹原好兵衛は、型紙による京染めの手法を用いた合羽刷りによって、多色刷大絵図を刊行した。その代表作である天保2年(1831)刊の「改正京町絵図細見大成」は、山・川・街路のあざやかな配色と詳細な表現に特徴がある。洛中のみならずその周辺部をも縮尺5000分の1で統一し、精度の面でも林吉永版の京大絵図との相異を鮮明にしている。しかもその縁辺の部分では、縮尺を次第に小さくして多くの名所旧跡を描き込むなど、随所に工夫が凝らされている。同年の出版目録に「大々図 京都絵図の冠にして其のくはしきことこれにまされるはなし」と自ら記す自信作であり、幕末まで30余年も版を重ねた。

同図のいま一つの特徴は、図中の地誌的記述が少ないことであるが、恐らくは、多色刷図としての特色を前面に出すためと、一方では書物の形での名所案内記や、前述のような裏面に解説を付した携行用図の盛行にみられるような機能の分化が進んでいた結果であろう。竹原好兵衛自体がこのような携行用小型図をも出版している。また、竹原好兵衛刊の多くの京都図の考訂は、在京の書家で多くの国絵図の出版にも関わった池田東籬亭(1788-1857)が行っており、図中に明記されている。

竹原好兵衛版の色鮮やかな京絵図は、他の版元のものを抑えて最も広く流布し、19世紀中期から幕末にかけての京都を代表する版元となった。

6. 明治初期の京都図

江戸時代後期の京都図刊行を代表する竹原好

兵衛に代わり、明治時代に入って政府の御用書肆となったのは、村上勘兵衛や石田治兵衛らである。明治初期の京都図は、観光用のものとは別に、行政的な地図に特徴付けられる。明治2年（1869）京都市中は三条通りを境とした上・下京の二つの大組と、その下の町組からなる組織に改編され、新しい町組ごとに小学校が創置された。明治初期の京都図には、幕末の京絵図を基図とし、それに明治の行政区画を重ね合わせたものが多い。

明治9年（1876）村上勘兵衛刊の「京都区分一覧之図」は、中でも大型で特徴的である。市街とその周辺を縮尺10000分の1とし、町組を5色の彩色と番号で区分、一覧できるようにした上で、さらに洛外縁辺を著しく縮小して表現する手法を採用している。しかも、用紙は和紙であるが、銅版印刷を採用したものである。

日本では木版印刷がよく発達していたが、江戸時代末ごろから銅版印刷が導入され、京都図ではまず小型図が刊行され、やがて明治時代に入り、前述のような大型京都図も刊行されるよ

うになる。

一方では、鳥瞰図風に表現した観光図が数多く出版されるようになった。

7. 大塚京都図コレクション

大塚京都図コレクションは、大塚隆氏収集による、近世から明治にかけての刊行京都図の唯一の体系的なコレクションである。平成12年度に大塚隆氏により、京都大学附属図書館に寄贈され、この名称で収蔵されることとなった。ここに述べたような京都図の特徴を余すところなく伝え、かつ今後の研究の重要な資料となる貴重なものである。

[参考]

金田章裕「左・右京図と京大絵図」、『古代荘園図と景観』東京大学出版会、1998年、
京都大学附属図書館編・刊『近世の京都図と世界図』2001年

（きんだ あきひろ）

